

『香川大学検定』を用いた自校教育の授業モデルの開発

葛 城 浩 一 (大学教育開発センター)
山 本 珠 美 (生涯学習教育研究センター)
白 山 淳 史 (教育学研究科3年)
高 橋 愛 美 (教育学研究科1年)
山 田 友 幸 (教育学研究科1年)

1. はじめに

近年、多くの大学において、「自校教育」なる取組が積極的に展開されるようになってきた。大川(2006)によれば、「自校教育」とは、「大学の理念、目的、制度、沿革、人物、教育・研究等の現況、社会的使命など、自校(自学)に関わる特性や現状、課題等を中心的な教育題材として実施する一連の教育・学習活動」(大川 2006、11 頁)のことである。

自校教育の歴史はそう古いわけではなく、先駆的に取り組んできた立教大学や明治大学でも、その実施は1997年からである。それがここ10余年の間に急速に展開されるようになってきた背景には、大学のユニバーサル化の進展が深く関係していると考えられる¹⁾。

すなわち、大学進学率は2002年に40%に到達して以降も上昇を続け、2009年には遂に50%に達した。この過程で、大学へ進学するのはもはや「義務」だと感じられるようになり、かつ「上」を目指さなければ比較的容易に大学に入学することもできるようになった。寺崎(2009)の言葉を借りるならば、「そもそも自分が入っている大学自体のことをよく知らない。いわば偶然に大学に入学し、たまたま教室に座っている」「偶然学生」(寺崎 2009、31 頁)が増えてきたのである。これまでも不本意入学の学生²⁾の中には、所属大学に対する「思い入れ」の乏しい学生は少なくなかったが、これに「偶然学生」が加わることで、「思い入れ」の乏しい学生が総体として増えてしまったのだといえよう。

こうした「思い入れ」の乏しい学生に対し、大学には、(所属)大学とはどのようなところか、そこで学ぶことの意味を考えさせるとともに、所属大学に対するアイデンティティを涵養させる必要が生じた。そこで、初年次教育のコンテンツのひとつとして、自校教育が積極的に展開されるようになってきたのである³⁾。

それでは、自校教育を行っている大学は一体どれくらいあるのだろうか。大川(2009)によれば、2008年時点において自校教育に関する授業を実施している大学は36.5%に及んでいる。特に国立大学は53.2%と、私立大学の35.8%を大きく上回っている⁴⁾。国立大学の実施率の方が高いのは意外な気もするが、国立大学では先述の「偶然学生」よりも、不本意入学の学生への対応として実施されているということなのであろう⁵⁾。

本学においても、不本意入学の学生をはじめとして、本学に対する「思い入れ」の乏しい学生は少なからずみられる。しかし本学では、自校教育として位置づけられるような教育・学習活動が本格的に行われているわけではなかった。そこで、筆者らは、有志の学生らとともに自校教育のツールとしての『香川大学検定』の開発を2008年度から行ってきた(詳細については、香川大学大学教育開発

センター編『香川大学教育研究』第6号を参照)。

しかし、自校教育のツールとしての『香川大学検定』といっても、その利用は配布レベルにとどまるものであり、教育・学習活動の中で位置づけられていたわけではない。そこで、筆者らは、『香川大学検定』を用いた自校教育の授業モデルの開発に取り組むことにした。本稿は、その一連の過程を記録するものである。

(葛城浩一)

2. 『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』の作成

地方国立大学の歴史は、誰もが知っている有名人による壮大なドラマがあるわけでもなく、概して「つまらない」とみなされてしまいがちである。勿論、一人ひとりの人生にドラマがあるように、それぞれの大学の歴史を繙けば、そこにドラマはある。しかし、教育学の一分野としての教育史、さらにその中の大学史に関する専門的な教育を行うのではなく、様々な学部の、様々な理由により入学してきた学生（その一部にはいわゆる「不本意入学」をした者もいるであろう）に対して自校教育を行う場合、電話帳のような分厚い五十年史や百年史に基づいて歴史的な事実を淡々と説明する講義をしても、とても学生の興味を惹く授業となるとは思われない。何らかの「仕掛け」⁶⁾が必要である。

その仕掛けとして、筆者らが試みたのが、『香川大学検定』の歴史編を独立させた小冊子『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』(資料1参照)の作成である。

既に『香川大学検定』歴史編(全22問)により、クイズ形式で香川大学の歴史を学ぶことのできる仕掛けは作ったものの、興味深いトピックを取り出して解説しただけのものであるため、トピック間のつながり、全体像がみえにくいという限界がある。そこで、本小冊子作成にあたっては、『香川大学検定』の問題からなる「検定編」の前に、全体の流れを解説する「解説編」を設けることとした。ただし、量が膨大となり学生が敬遠するものとなっては本末転倒となるため、コンパクトかつわかりやすいものとなることを心がけた。

「コンパクトかつわかりやすい」ということから、まず判型は『香川大学検定』同様、A5版とした。頁数も多くならないよう、解説編は8章構成で各章見開き2頁となるよう、内容を厳選した。立教大学や明治大学等のように、半年15コマ、あるいは年間30コマを自校教育にあてることを想定すれば、細かく章立てを考える必要があるだろうが(立教大学2009)、本学の場合、そのレベルの自校教育を計画しているわけではないためである。

章立てを考えるにあたって、大学の発展史はわが国の近代化の歴史とパラレルに進行したことがわかるよう、香川大学史を小中高校で学んだ基礎的な歴史的事実を軸に展開させることとした。その結果、本小冊子の構成は以下の通りとなった。括弧内は簡単な内容である。巻末には、より詳しく知りたい学生のために、『香川大学五十年史』等、これまでに刊行された大学正史の一覧を参考文献として挙げた。なお、本小冊子は、山本珠美(生涯学習教育研究センター准教授)、葛城浩一(大学教育開発センター准教授)、西本佳代(教育・学生支援機構特命助教)の計3名が分担執筆した。

第Ⅰ部 解説編

1. すべては明治維新からはじまった！（教育学部、農学部の前身校の成り立ち）
2. 幸町キャンパスは大正デモクラシーとともに（経済学部の前身校の成り立ち）
3. 破壊されたキャンパス（太平洋戦争の影響）
4. 香川大学、誕生！（新制大学として発足）
5. キャンパスで闘う学生（学生運動）
6. 総合大学化する香川大学（法学部、工学部及び医学部前身校の成り立ち）
7. 成長する香川大学（情報化、生涯学習社会、国際化への対応）
8. 香川大学にまつわる知っておきたい有名人（保井コノ、神原甚造、今雪真一、大平正芳）

第Ⅱ部 検定編

参考文献

香川大学関連年表

3. 『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を用いた授業実践

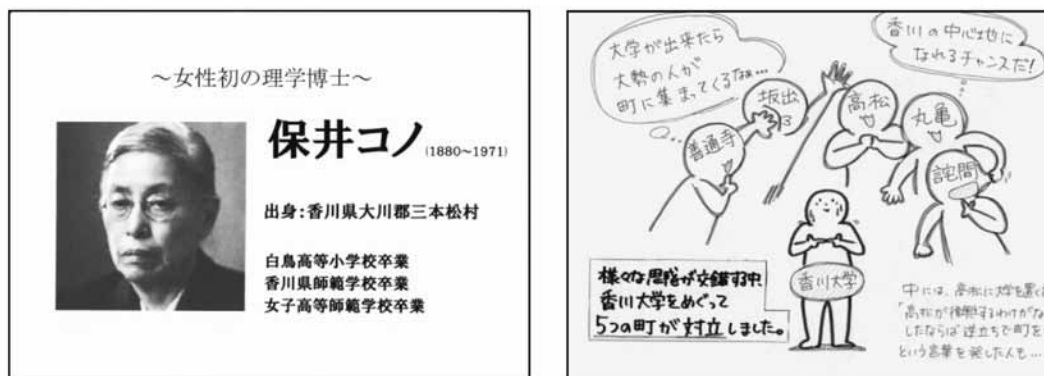
筆者らは、作成した『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を用いた自校教育の授業モデルの開発を行うこととした。まずは、『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を用いた自校教育の実践を、筆者の担当する授業「大学入門講座－夢に近づくためのキャンパス活用法－」（履修生100人）で試行的に行った。

本授業は、2011年度前期に開講された、全学共通科目主題A「人生とキャリア」のうちの1科目である⁷⁾。「大学とは何か」について学び、大学卒業後の人生を視野に入れつつ大学4（6）年間をどのように過ごすべきかについて、一人ひとりが考えるための授業としてデザインされたものである。達成目標としては、①大学の発展過程及び大学に期待されている役割について、説明できるようになる、②自らの大学生生活の過ごし方について、計画を立てることができる、③グループワークを通して、自分の意見を表現しつつ、他者とのコミュニケーションがはかれるようになる、の3つを掲げている。

自校教育は達成目標①の部分に該当する取組であり、6月2日の1コマ（90分）を充当した。それまでの授業において、中世ヨーロッパにおける大学誕生から、近世・近代の変容、日本における大学の発展過程（帝国大学、私立大学）について講義し、大学がなぜ社会において必要とされているのか、学生に考えさせてきた。当日は、香川大学を含む地方国立大学の誕生に関する簡単な講義と、「『香川大学の知られざる歴史』を語り合う」をテーマとしたグループワークの2本立てで実施した。

授業内容及び実践の成果についての詳細は、山本（2012）に譲るが、ここで簡単に後半のグループワークについて紹介する。事前に7－8人を1グループとする14グループを作り、各グループで司会（1人）・プレゼンター（4人）・コメンテーター（1人）・記録員（1－2人）の役割を決めた。プレゼンター担当となった学生は、筆者が予め指定した4つのテーマ「保井コノ－偉大な先輩（女性編）－」「大平正芳－偉大な先輩（男性編）－」「幸町キャンパスの誕生、破壊、復活」「香川大学図書館と神原文庫」に分かれ、テレビの情報バラエティ番組である『トリビアの泉』や『1分間の深イイ話』、『ナニ

『コレ珍百景』をイメージして、一人あたり3分間のプレゼンテーションをすること、その際、A4サイズのフリップボードを最低3枚用意することを指示した⁸⁾。プレゼンテーションの準備にあたっては、事前に配付した『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』の該当箇所を参照することを求めるとともに、ヒント・指示を与えた。以下は、実際に学生が作成したものである。



グループワークは筆者の予想を超えて学生が「乗って」くれたため、楽しい雰囲気の中、学生同士盛り上がりながら学ぶ機会となった。事後の感想には「香大のことが少しわかったし、大平正芳という全く知らなかった人物について知る機会ができて良かった。」「プレゼンターはしっかり調べてきて、準備は良かったし、プレゼン中の発表態度や周りの聞く態度も良かったと思います。」とあり、1コマ90分という時間的制約の中で、「香川大学に興味を持つこと」という目標はおおむね達成できたといってよいと思われる。

ただし、自校教育としては反省点がないわけではない。講義もグループワークも、内容が新制大学発足前の戦前から戦後直後に偏ってしまったこと、その結果、現在の教育・研究活動については（この90分に限っては）まったく触れることなく終わってしまったことである。良くも悪くも「トリビア」となってしまう、「つい人に教えたくてしまうような雑学・知識」として学生の興味は喚起できても、これから4（6）年間、香川大学生としてどう生きるかという本授業のそもそもの目的へつなげられたかといえば心許ない。もっとも、今回は「1コマで何ができるか」ということを出発点として、自校に興味を持つ授業構成を考えたものであり、それは過大な期待かもしれない。今後の課題としたい。

（山本珠美）

4. 『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を用いた授業モデルの開発

山本教員の実践からもわかるように、『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を用いて自校教育を行うことは十分に可能である。しかし、その実践が可能であったのは、大学の成り立ちや本学の事情（歴史を含む）に詳しく、100人規模のクラスでグループワークを成立させられる山本教員の力量に拠るところが大きい。実際、自校教育の課題としてもっとも多く挙げられているのは「担当教員の選定」である（大川 2009）。自校教育をより多くの学生に、かつ安定的に提供するためには、香川大学に所属する教員であれば誰でも比較的容易に自校教育を行うことができるような授業モデルの開発が必要

だろう。

そこで、『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を用いた自校教育の授業モデルの開発が、本稿執筆者の一人である葛城教員の担当する授業「社会学特別演習Ⅱ」で試行的に行われた。本授業は、2011年度後期に開講された教育学研究科の授業である。高等教育がおかれている現状や高等教育機関で生起している諸問題について考える授業であり、本年度は「自校教育」がテーマとして取り上げられた。達成目標としては、①高等教育がおかれている現状をふまえて、自校教育の意義について説明することができる、②社会調査の手法も用いながら、自校教育のために適切な資料を収集することができる、③収集した資料を用いて、本学の自校教育に関する報告及び提案をすることができる、の3つが掲げられている。

授業モデルの開発に携わったのは、その受講生である、白山淳史（教育学研究科3年）、高橋愛美（教育学研究科1年）、山田友幸（教育学研究科1年）の3人である。歴史的な事実を淡々と説明するようにつまらない授業にならないよう、グループワークも取り入れた授業モデルの開発を目指した。また、実際に授業を行うことがすぐにでもできるよう、授業モデルだけでなく、配布資料やスライド資料についても作成した。以下に示す授業モデルは、この3人によって作成されたものである。

なお、授業モデルの本文（枠に囲まれていない部分）には、板書やスライドで学生に伝えるべきポイントや、ワークに関する学生向けの指示が記されている。また、適宜挿入されている枠の中には、指導にあたっての留意点等についての説明が記されている。

（白山淳史、高橋愛美、山田友幸）

香川大学の歴史を学ぶ

☆この授業は、香川大学の歴史を概観する中で、学生が香川大学生として今後どうあるべきかを考えることを目標としています。①戦前、②戦時中・戦後、③香川大学創立期、④大学紛争期、⑤総合大学化期に分け、間にディスカッション等のグループワークを挟みながら香川大学の歴史について学んでいきます。

◇授業の達成目標

- ① 香川大学の歴史を説明することができる。
- ② 自分が香川大学生として今後どうあるべきかを考えることができる。

0. はじめに (15分)

[ワーク1] 香川大学についてのディスカッション

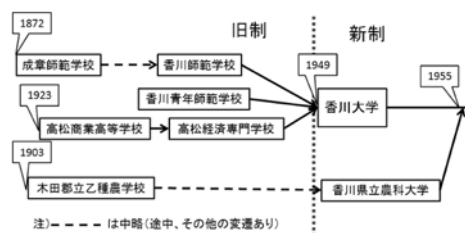
- ① 香川大学について知っていることや香川大学に入学した理由について、各自で考えて、ワークシートに書いてください。(5分)
- ② グループで意見を共有してください。(10分)

☆ワークシートを配布し、各自で記入させます(5分)。その後、グループで意見を共有させましょう(10分)。様々な立場からの意見が出やすいよう、グループは他学部との混成メンバーを意識して編成するとよいでしょう。

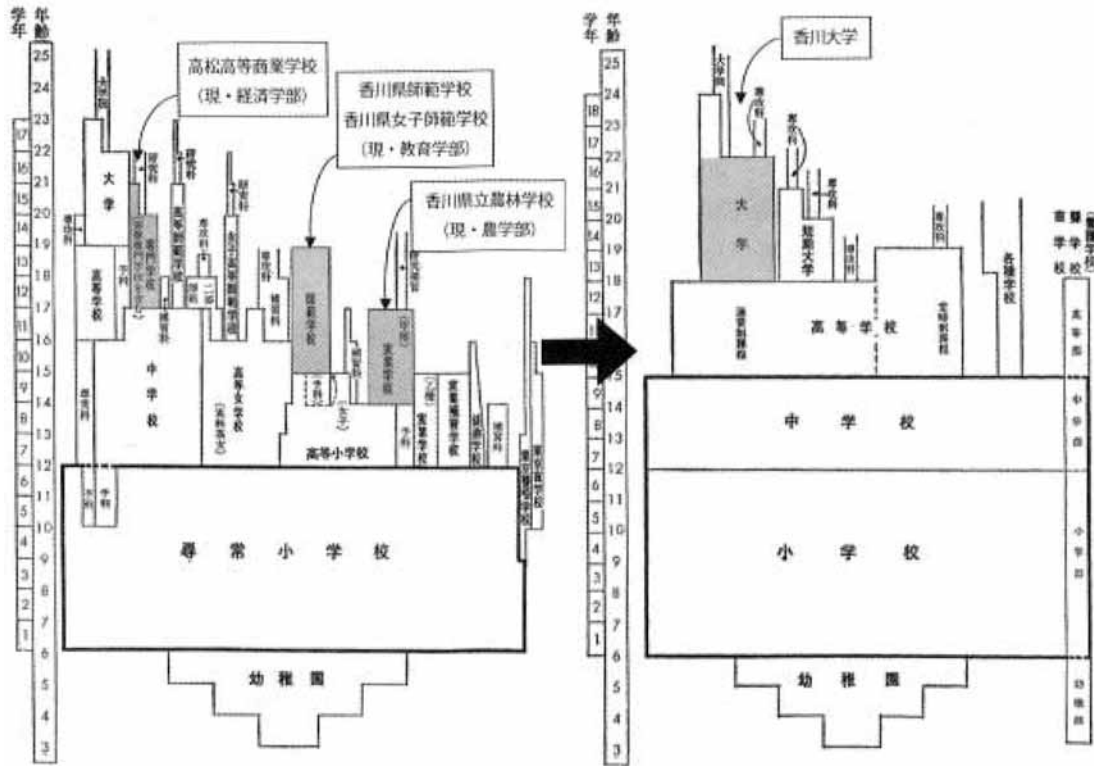
☆香川大学について表面的なことしか知らない、本当は不本意入学だった、といった意見が予想されます。そうした学生に、「香川大学についてネガティブなイメージを持ったまま過ごすより、ポジティブな印象を持ってキャンパスライフを送った方がいいのではないか」といった自校に関心を持つような言葉かけをしてください。

1. 戦前の香川大学 (5分)

- ・ 戦前、他県には「大学」という組織はあったものの、香川には「大学」はまだなく、香川大学の前身となる中等・高等教育機関があった。
- ・ 成章師範学校 (1872年-)
 - ・ 教育学部の前身校
 - ・ 各府県ごとに置かれた教員養成機関 (中等教育機関)
- ・ 木田郡立乙種農学校 (1903年-)
 - ・ 農学部の前身校
 - ・ 当時の制度では中等教育機関のうち、「実業学校」にあてはまる。



- ・高松高等商業学校（1923年）
 - ・経済学部の前身校
 - ・当時の制度では「専門学校（高度な専門教育を行う学校）」にあたる高等教育機関



1919（大正8）年

1949（昭和24）年

出所：香川大学教育・学生支援機構『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』

2. 戦時中－戦後の香川大学（20分）

☆ここでは、経済学部作成のDVD『学び舎を我らの手で』を視聴します（視聴箇所は4:08－20:17）。このDVDでは、高松高等商業学校が戦時中焼けてしまったから、高松に再び校舎を建設するまでが紹介されています。校舎を取り戻すために募金活動等に取り組む学生の様子をみせ、当時は地域をも巻き込む学生中心の大きな活動が行われていたことを、現在の学生に伝えることを目的としています。

- ・DVD『学び舎を我らの手で』を視聴

☆「学生中心の大学」を掲げる香川大学では、学生が主体となった様々な取組が行われています。しかし、この頃の学生も、校舎建設のために各地で活動を行ったり、地域住民をも巻き込んだりした、まさに「学生中心」の大きな活動を行っていたことを伝えましょう。

3. 香川大学創立期（5分）

3-1. 新制大学の発足

- ・1947年 学校教育法制定
 - ・旧制高等教育諸機関等をすべて単一な4年制の新制大学に再編
 - 新制大学は中等教育機関を修了したものであれば、誰でも進学できる機関に。

3-2. 香川大学の誕生

- ・1948年 文部省発表
 - 各県毎に国立大学が設置されるように。
- ・1949年 香川大学誕生
 - ・高松経済専門学校（高松高等商業学校の後身校）→経済学部へ
 - ・香川師範学校（成章師範学校の後身校）、香川青年師範学校→学芸学部（現・教育学部）へ
- ・1955年
 - ・香川県立農科大学（木田郡立乙種農学校の後身校）が国立に移管→農学部へ

4. 大学紛争期の香川大学（30分）

☆大学紛争期の香川大学及び香川大学生について知ること、大学生は社会への影響力や発言力を持ちうるということを学生に考えさせる目的があります。そのためには、実際に香川大学で起こった「学長室占拠事件」が効果的でしょう。

また、当時の学生の要求の中で、現代とも共通する「授業料」について、学生に考えさせます。それにより、当時の学生との共感を通して、現在の大学生としての自分達のあり方を考えさせることや、「大学生は大学、さらには社会を変えうる立場にある」という意識を持たせることが大切です。

- ・1960年代の大学
 - ・学生による学校や社会への抗議（ベトナム反戦、安保闘争等）
 - 「学生運動（大学紛争）」例）東大安田講堂事件等
 - ・大学生が社会に影響力を与える行動
 - 香川大学でも学生運動がおこる。
- ・「学長室占拠事件」
 - ・1969年7月に香川大学にて発生
 - 「学生 VS 大学」の争いが発展し、学生が学長室を占拠
- ・学長室占拠事件の原因
 - ・当時の学生の要求
 - 「一般教養に対する不満」「サークル部室・学生寮費負担への不満」
 - 「授業料値上げ」「学生の各種利権公認」等

☆時代背景が違うため、現代の学生には共感できないように思われます。そこで、現代の学生にも影響を与えうる「授業料」について考えさせることで、同じ立場で大学生としての自覚や使命感、そしてそれに基づく行動力を問うていくことが効果的です。

〔ワーク2〕 授業料が値上げされた場合についてのディスカッション

- ①あなたはどのように思いますか？そしてどのような行動をとりますか？
各自で考えて、ワークシートに書いてください。（5分）
- ②グループで意見を共有してください。（5分）

☆香川大学の現在の授業料（通年;535,800円 半期;267,900円）と、1単位あたりの授業料（124単位で計算すると約17,283円）を提示し、具体性を持たせることで、学生の話合いが活発になるでしょう。同時に、授業料について知ることで、これからの学びへの意欲を上げるという効果もあります。

なお、2010年11月にイギリスにおいて、それまで年間3,290£（日本円で約40万円）だった国立大学の授業料を最大9,000£（日本円で約120万円）に値上げするという法案が可決され、学生の大規模デモが起こったという現状を紹介し、切実な問題として学生に投げかけることも有効です。イギリスの大学生との比較から、大学生としての自覚や使命感、行動力について考えさせる目的があります。

5. 総合大学化する香川大学（10分）

・大学紛争後の香川大学→総合大学化の流れ

・法学部

- ・香川大学開学以前からの宿願であり悲願

「高等裁判所所在地に法学部を！」をキャッチフレーズに、法学部設置運動が盛んに展開

→一県一大学という原則があり、立ち消え

- ・香川大学発足後も法学部設置を継続して要求

→1981年 「日本一新しい国公立大学の法学部設置」

・工学部

- ・1967年 芸術工学部設置構想検討 → 学生運動もあり、立ち消え

- ・平成 国立大学における新学部創設は強く抑制（財政難）

科学技術分野、情報系に限り新学部を承認

→1997年 旧高松空港の跡地に工学部キャンパス設置

- ・医学部
 - ・1978年 香川医科大学設立
 - ・百十四銀行や四国電力から、それぞれ1億円という多額の寄付
 - 地域の期待
- ・2003年 香川大学と統合
 - ・地理的に近接した両大学が人的・知的資源を結集
 - 地域及び社会の要請に広く応える目的
- ・香川大学＝地域からの期待が大きい

☆新学部設置の動きからは、香川大学に対する地域の要請、期待が大きいことがうかがえます。それについて学生に示唆することで、地域貢献に対し意欲的な姿勢を促すことも大切です。

6. まとめ（5分）

〔ワーク3〕今日の授業のまとめ

今日の授業を通しての、新しい発見、気づき、考えたことや、香川大学生として今後どうあるべきかについて、ワークシートに書いてください。

◇授業の達成目標

- ① 香川大学の歴史を説明することができる。
- ② 自分が香川大学生として今後どうあるべきかを考えることができる。

達成できたでしょうか？

☆最後にこの授業の達成目標を達成できたかを確認して授業を終えます。

5. おわりに

以上、本稿では、『香川大学検定』を用いた自校教育の授業モデルの開発に取り組んできた、その一連の過程について記してきた。『香川大学検定』の歴史編を独立させた小冊子『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』は、自校教育を行う際の副読本、あるいはテキストに足るものであると自負している。また、この『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を用いた自校教育の授業モデルも、香川大学に所属する教員であれば誰でも比較的容易に自校教育を行うことができる程度にまでマニュアル化することができたと自負している。

このような『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』の作成及びそれを用いた自校教育の授業モデルの開発によって、自校教育をより多くの学生に、かつ安定的に提供しうる可能性を飛躍的に高めることができたといえよう。それだけではなく、それらを教職員に対して援用することで、教職員に対して自校教育を提供しうる可能性を見出すこともできた。実際、職員はともかく、特に教員に関しては、学生以上に所属大学に対する「思い入れ」の乏しい者が少なくない。「たまたまポストがあったからその大学にいる」という教員が大半を占めているからである。大学の生き残りをかけて教職員のアイデンティティの共有が求められている現状においては、特に教員に対する自校教育は非常に重要である。今後は、今回開発された授業モデルを、新任教員研修の研修内容に援用することについても検討していきたいと考える⁹⁾。

最後に、筆者らは、本学の自校教育がこれで事足りると考えているわけではないことを付言しておきたい。筆者らの関心は、特定の担当教員や授業（また、その受講学生）に閉じた、いわば「(対象が)狭く(内容が)深い」自校教育ではなく、あくまで、特定の担当教員や授業に依らない開かれた、いわば「(対象が)広く(内容が)浅い」自校教育の授業モデルの開発にあった。

先述のように、本学では、自校教育として位置づけられるような教育・学習活動が本格的に行われているわけではない。そのため、こうした「(対象が)広く(内容が)浅い」自校教育の授業モデルの開発に取り組んできたわけであるが、その一方で、「(対象が)狭く(内容が)深い」自校教育の授業開発も同時に進めていかなければならないと考えている。「(対象が)狭く(内容が)深い」自校教育を担当できる、大学の成り立ちや本学の事情（歴史を含む）に詳しい教員は多くはないし、時間が経てばそうした教員も退職していなくなってしまう。そうした教員が在職しているうちに、「(対象が)狭く(内容が)深い」自校教育の授業開発を行い、映像や文書によって丁寧に記録しておくことで、本学の「語り部」を絶やさぬようにすることが必要であると考えている。

(葛城浩一)

注

- 1) これ以外にも、大川(2006)は、大学設置基準の大綱化に伴う教養教育の多様化や大学理念・目的の明確化・周知の必要性、「評価者」としての学生の資質向上を挙げている。
- 2) 寺崎(2010)によれば、「偏差値的に上のレベルになればなるほど、よそへ行きたかったと思う率が高い」ため、「上の方の学生にこそ、実は今いるこの大学はどういう特質があるかを、きちんと教える必要がある」(寺崎 2010、4頁)という。

- 3) 2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、「初年次における教育上の配慮、高大連携」という項の中で、「大学に期待される取組」として「自校の歴史の学習」が例示されている。
- 4) 全国752大学のうち、373大学（国立62大学、私立260大学）から回答が得られ、このうち136大学（国立33大学、私立93大学）が自校教育に関する授業を実施していると回答した。なお、「検討中」と回答した33大学を含めると、自校教育に関する授業を実施、もしくは検討している大学は45.3%とほぼ半数に及んでいる。
- 5) 大川（2006）によれば、「私立大学が、愛校心・帰属意識の涵養や自学沿革史の理解を自校教育授業の目的として重要視するのに対し、国立大学では、それよりもむしろ「大学適応支援教育」、あるいは「自己探求教育」「キャリア・プランニング教育」を自校教育授業に期待するという傾向」（大川 2006、15頁）があるという。
- 6) 例えば、近年では、九州大学が創立百周年記念事業として、展覧会「九州大学百年の宝物」（会場：九州国立博物館、期間：2011年11月15日－12月18日）を開催したり、専修大学が創立130周年記念事業として、創立者4人の青春時代を描いた映画『学校をつくろうーそのとき、若者たちは未来を見たー』（原作：志茂田景樹『蒼翼の獅子たち』）を製作・公開したりする等、「大学を魅せる」仕掛けづくりが散見される。これらは当該大学の学生を対象とした自校教育にとどまらない取組であるが、興味深い事例である。
- 7) 主題A「人生とキャリア」は、「市民としての責任感と倫理観」を育むことを目指す科目である。大川（2009）によれば、各大学の自校教育が目指す教育成果として、「倫理観」を挙げる大学が多かったという。このことは、自校教育が「倫理観」の醸成に資するものであることの証左であるといえよう。この点に鑑みても、この主題A「人生とキャリア」において、自校教育の授業実践を行ったことは非常に適切であったといえよう。
- 8) この「情報バラエティ番組形式」という方法は、専門教育としての大学史の授業であれば不十分かもしれない。しかし、そもそも『香川大学検定』は、遊び要素満載の「楽しい」取組である。その楽しさを含む実践の方が、『香川大学検定』の精神を活かすことができると考えた。
- 9) 寺崎（2009）は、「教員にとっての「初任者教育」もFDの一つとして求められているが、その一部は間違いなく自校教育でなければならない」（寺崎 2009、35頁）と言及している。なお、2011年現在、本学では、新任教員研修の際に『香川大学検定』を配布しているが、その内容に言及することまではしていない。

参考文献

- 河原勝浩・林晶子・葛城浩一、2009、「香川大学検定をつくる！ー自校教育へのアプローチー」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第6号、93-101頁。
- 山本珠美、2012、「大学入門講座ー夢に近づくためのキャンパス活用法ー」葛城浩一編『香川大学検定』を用いた自校教育の実践記録』61-70頁。
- 大川一毅、2006、「大学における自校教育の現況とその意義ー全国国立大学実施状況調査をふまえてー」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第8号、11-21頁。
- 大川一毅、2009、「全国大学における自校教育の実施状況ー2008年度「自校教育実施状況調査」を

ふまえてー」大学教育学会編『大学教育学会誌』第31巻第1号、172-178頁。

立教大学、2009、「授業探訪 特集「自校教育ー今後の課題と展望ー」『大学教育研究フォーラム』第14号、70-90頁。

寺崎昌男、2009、「自校教育ーそれはなぜ重要かー」『大学時報』58(328)、30-35頁。

寺崎昌男、2010、「自校教育の役割と大学の歴史ーアーカイブスの使命にふれながらー」金沢大学資料館編『金沢大学資料館紀要』第5号、1-16頁。



資料1. 『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』表紙